

## 福翁自伝

福翁自伝は福沢諭吉(1835年～1901年)が晩年に口述筆記させ、それを自分自身で書き下ろした原稿を元にして出版された自伝で、自伝文学の傑作と評価されています。深い考察と卓越した表現力で、諭吉の幼い頃から老年までの出来事と波乱に富むその時代背景が生き生きと描かれています。福沢諭吉は言うまでもなく我等が母校慶応義塾の創設者であると共に、偉大な啓蒙思想家、オピニオンリーダー、教育者でありました。日本の代表的政治学者・丸山眞男はその著書「日本の思想」の中で「あらゆる時代の観念や思想にいやおうなく相互の連関性を与え、自己を歴史的に位置づけるような中核、あるいは座標軸に当たる思想的伝統はわが国にはなかった」と述べ、福沢諭吉は例外的存在で傑出した思想家であったと語っています。福翁自伝は大坂で生まれた「幼少の時」から始まり、大阪での緒方洪庵の適塾における蘭学修行、1860年の渡米、1862年・幕府使節団の通辞としての渡欧、1867年幕府の高官として再度の渡米、王政維新・・・と続き「老余の半生」で筆をおいています。父・百助は豊前中津藩の財務を大坂で取り扱う下級武士でした。百助は自分のみならず子供達も生涯下級武士の地位に甘んじた生活を強いられることを思い、次男の諭吉は僧侶にしたいと生前妻であるお順に語っていて、諭吉は母から何度もその言葉を聞き、福翁自伝の冒頭の部分で「私のために門閥制度は親の仇でござる」という有名な言葉を述べています。中津藩で少年時代を過ごした諭吉は長崎で蘭学修行を経た後、大阪の適塾で蘭学修行の日々に明け暮れます。大阪の緒方洪庵の適塾で過ごした三年余りの日々は福沢諭吉にとって生涯の基盤を作った貴重な日々でした。北浜にある緒方洪庵の適塾は現在そのままの形で、阪大医学部の管理のもとに記念館として残っています。彼の不羈独立の精神は天性のものとも言えますが、当時、米の集積地・商業の中心地として全国の藩の蔵屋敷があり、ある程度封建治外である大阪で勉学した時に芽生え、全部で三度にわたる、渡米・渡欧の経験によって養われたと思います。1858年に中津藩から江戸で蘭学を教えるようにという命令で築地鉄砲洲の中津藩中屋敷でささやかな家塾を開きますが、これが慶應義塾の礎です。江戸に来た1958年に横浜を訪れ、オランダ語が全く通じず英語が必要であることを学び、失望落胆しますが、英語の勉強を始めてみると同じABCを使い文法も似ていることがわかり、蘭英辞書を購入して最初は独学、のちに森山多吉郎について英語の学習をしました。

1862年木村撰津守の私的従者として咸臨丸(艦長は勝海州)で最初に渡米した時はアメリカの議会制度、レディファーストの行動形態、初代大統領ワシントンの子孫が重んじられているわけではないことなどを学習、ウェブスターの辞書その他を購入しました。1862年には幕府使節団の随員・通辞として渡欧、香港、シンガポール、スエズ、カイロなどを経てマルセイユからパリに到着、途中で見聞したアジア・アフリカの植民地での現地人の苦しみなどもつぶさに見聞しています。フランス、イギリス・オランダ・プロシヤ・ロシア、ポルトガルを歴訪、この時は選挙法、議会と内閣、徴兵令・税制・病院、銀行、保険会社、郵便、学校などの政治制度、経済組織・社会施設などを積極的に研究、見学して知識を深めました。渡欧使節団がパリを訪れた時、彼等が書店訪問、施設見学の時に発する質問の着眼点の良さ

と向学心、既得の科学知識の程度の高さにフランス人が驚いたという記録が残っています。又幕府から託された書籍代と私費を投じて、数種類の辞書、倫理学、哲学書、経済書、文武学校の規則の書、病院貧院規則の書、人文科学、自然科学など広範囲にわたる大量の書籍を購入しました。私費で購入した書籍の中にはフランソワ・ギゾーの欧州文明史、トーマス・バックルの「英国史」などがあり、著書「西洋事情」「文明論の概略」などの際に役立てたと言われています。

1867年に御勘定吟味訳という幕府の高官として、渡米した際もあらん限りの書物を購入、有名なウエーランド経済書も購入しました。福翁自伝の中で(再び渡米した時に)「大中小の辞書、地理書、歴史などはもとよりその他の法律書、経済書、数学書などもその時に初めて日本に輸入して、塾の何十人という生徒にめいめいその版本を持たせて立派に修行できるようにしたのは実に無上の便利でした」と自伝の中で述べています。

渡欧の際の論吉の勉強ぶりについて比較文化論の第一人者・芳賀徹はその著書「大君の使節」の中で「一回の観察をその時限りで終わらせず、事あるごとに他の面から考慮し、他の知識と比較し、関連づけてとらえなおしていく。知識は足し算的、並列的に増えていくのではなく、掛け算的、立体的に構成され、彼なりの統一的なビジョンに総合されてゆくのである」「壮麗なパリ、ロンドンなどの街並みに感心するだけでなく、その外観の背後にある文明の構造をとらえようと努めた」「目前のディテールにかかずらわず、それら細部を関係づけ作動させる全体のオーガニゼーションに着目していた」と述べています。

幕末の時代、論吉は開国主義者ではありましたが、討幕主義者ではなく、絶対主義政権下での日本の近代化(モナルキ説・モナルキは将軍)をめざしていましたが、攘夷論者からは暗殺の対象となり、夜は絶対出歩かないようにしていたのに、ある時用事で深夜に自宅まで歩いて帰らなくてはいけなくなった時に、暗い夜道で一人の侍と出会い、すれ違いざま、二人ともどンドン逃げた、という面白いエピソードが自伝にあります。「幕府は早晚倒れなければならぬ。たださしあたり倒す人間がないから仕方なしに見ているのだ」と自伝に書かれています。

1868年、日本は騒乱の時代を経て明治維新となり、論吉は士族ではなく平民の位を選び、明治新政府からの度々の招聘も病気その他を理由として受けず、爵位、勲章、学位なども一切断りました。生涯その姿勢を貫いたことは実に立派であったと思います。明治新政府の招聘を受けなかった理由として自伝の中で①役人の空威張りをするのが嫌だ②大官の品行がよろしくない③幕臣の忠臣義士の寝返りが気に入らない・(注・勝海舟・榎本武揚等・「やせ我慢の気」参照)④官尊民卑の旧習を打破するために自分が手本を示したい、と自伝で述べています。福沢諭吉は新政府の招聘には応じませんでした。終始、様々な側面から明治政府のサポートを続け、新政府の指針というべき「五か条の御誓文」に、福沢諭吉の思想が反映されていると言われています。国会開設に関しても新聞を利用してその必要性を何度も表明して、貢献しました。彼が一貫して目指していたのは、近代国家日本の発展と眞の独立、そして若者の教育でありました。

彼が幕末から明治にかけて、その主義主張を世に問うて出版した「西洋事情」「学問のすすめ」「文明論の概略」その他はことごとくベストセラーとなり、多くの人々に影響を与えました。晩年に自分の人生を顧みて、「愉快とも有難いとも言いようがない。命あればこそこんなことを見聞するのだ。前に死んだ同志の朋友が不幸だ。ああ見せてやりたいと毎度私は泣きました。」と自伝に記しています。諭吉の一生はまことに幸せな生涯であったと思います。その幸せのピークは廃藩置県と日清戦争であったと小泉信三が述べています。最後に彼が英語から新しく作った言葉を記載します。

演説・自由・西洋・独立・競争・家庭・権利・幸福・多事争論

この度、読書会のメンバーと一緒に福翁自伝を読み、様々な感想、ご意見を聞くことが出来たことは誠に幸せでした。彼が偉大な啓蒙思想家、教育者であったことがあらためてわかり、ました。明治維新以降現在にいたるまでに福沢諭吉だけでなく、その門下生が社会でいかに活躍したかということは、先般、知的好奇心の会の「福沢門下の企業家」でも教えて頂きましたし、皆様もよくご存知のことと思います。慶應義塾を卒業できたことをあらためて誇らしく思っています。

高橋あかね